

感性、物づくり、物語

— 共感の世界の広がり と 繋がりを考える — (全 12 回)

第9回 経験論の見直し(2) — 感性の位置付とヒュームの共感

長島知正 (早稲田大学理工研招聘研究員)

(1) 何故、18世紀のイギリス経験論を見直すのか — 感性の認識論における位置づけと今日の社会的問題の契機

前回に続いて、イギリス経験論の見直しから始めます。イギリス経験論は何より、自然科学の発展によって勢いを得た合理主義や理性への過剰な信憑という流れへの疑問を元にしていました。この“疑問”の先にあったのが、デカルトの合理主義思想と云われています。

デカルトが西欧近代化になしたことを思想面からまとめると、大きく二つあると云えるでしょう。一つは、“我思う、ゆえに我あり”という有名な言説に象徴されている、〈私〉という自我を持った精神的存在として個の存在です。これは、西洋における人間像への出発点と見做されたことはご承知のとおりです。

もう一つは、「自我と云う精神を持った〈私〉とは全く別な実体として存在する様々な物から構成されている自然的世界」という思想です。物と明確に切り離された精神により、自然的世界を明晰に把握出来ると信じたデカルトは、具体的で確かな科学的方法として数学があると考えた訳です。ガリレオやコペルニクスによる地動説が既に唱えられ、もはや地球は不動の世界の中心ではないことが知られていた時代でしたが、数学が科学を発展させる確かな方法になると考え、「方法序説」を著しました。そうした彼の考えは後にニュートンによる、近代的な力学の確立という形で歴史上の大きな流れを産み出したことも広く知られています。

歴史を振り返る時、17世紀のデカルトの業績がどれほどの影響かということとは、近代における数学の果たす役割を見抜いたことから、ある程度想像さ

れると思います。しかし、「方法序説」は有名ですが、実際には近代のはじまりの時代に書かれていて、話は相当に複雑なものです。理由は宗教がすべてにかかわっているためです。今日とは違い、神の存在を無視した話をすれば身の安全が奪われるという時代ですから、それは出来ません。キリスト教抜きに近代西洋を本当に理解するのは非常に大変なことなのかも知れませんが、特に理系の人には想像し難い面もありそうに思います。(多少脇道にそれますが、この辺りを面倒とって、短絡的に切り落とすようなことが起きないように工夫、例えば、良質な翻訳の発刊と共にアーカイブを整備していくことは大切なことです。この時代に出版された貴重な著書の翻訳は極めて大切な人類の資源ですが、日本語自体古くなって、読むには相当苦痛な状態になるものも多く、著者のような素人がアクセスする時、大きな障害になる事を敢えて指摘しておきます)。

実際、デカルトは明晰な自然理解のための方法として数学の有効性を主張し、一方では神の存在を証明したというのですから…。全体として彼が何をやり、何をやっていないかをきちんと見極め、評価することは簡単なことではないようです。イギリス経験論を見直すという本稿の狙いは、20世紀の工業社会へと繋がる近代の基盤となった合理主義を見直す、つまり、その限界や問題点を見通すことによって、複雑に絡み合い現在解決困難な課題への対処や、感性工学などの未踏領域にある試みへの手掛かりを求めているためです。

言葉を換えれば、現代に繋がる合理主義の源に横たわるデカルト思想の限界や問題は何かなどといった事と共に、ヒュームなどのイギリス経験論を見直すことを併せ、私たちのこれから進む方向の手掛かりにしたいのです(デカルト以降に登場したカントなどの思想に具体的に触れることなく、将来を見通すなどといったことは、議論として余りに杜撰という批判があるのは当然ですが、ここでは紙幅の都合もあり、そうした詳細は一切省略し、デカルト、ヒューム、カントといった相異なる近代の哲学に関して、共通した思考枠と見做せる観念の知覚という概念を説明することにして(付録①参照)、先を急ぐことにします)。

さて、科学や技術に関連するという立場からは、デカルトやカントなど何か関係があるのかと受け止める人も相当いると思いますが、近代的合理主義には

以下のような内在する基本的課題や限界があることが分かります。

あ) 心身問題

デカルトは、世界は〈私〉という精神の存在と〈私〉の外に物体として存在するものから構成されているとした。このような〈私〉という理性的な精神によって、〈私〉の外にある広がりのある物体、延長は明晰に認識されるとした。しかし、その結果、〈私〉という精神は物としての身体から切り離された実体に、心と身体は分離して存在するという「心身二元論」がもたらされました。これから、心と身体は別々な属性を持つ存在であり、心と体は互い関係することができないという「心身問題」が発生します。

とはいえ、デカルトは心身二元論によって精神と物体としての身体を峻別する一方で、脳の部位に「松果腺」があり、そこで、身体と精神は繋がっていると、部分的に心身合一しているとする考えをしています。更に、彼は情動論も展開していて、理性主義者デカルトが情動論を展開した真意は、何だったのだろうという疑問が残ります。

いずれにしても、心身合一は心身分離した論理とは矛盾していることは明らかで、デカルト以降に心身問題の解決は持ち越されましたが、現在に至るも解決困難な問題とされます。

デカルト以降の心身問題への回答の試みとしては、神の存在に全面的に帰着させる機会原因論（マールブランシュ）や反対に神の存在を否定したスピノザの並行論などが知られていますが、それらは皆、二元論という前提、つまり精神と身体と云うものを同等な実体と見做すという前提を認めたくえで、それを解決しようというものです。

これらとは別なアプローチが19世紀のヘルムホルツやヘフナーなど著名な物理学者による精神（心理）—物理と呼ばれる方法が提案されています。この方法は、心理現象を物理的な方法に基づいて解析するもので、視覚など感覚系で具体的に成果を上げています。そうしたアプローチは、自然科学の言葉で議論され、馴染みやすい議論のため、20世紀になってむしろ勢いを増そうとしていると思います。そうしたことの例として、近年進歩を遂げる医学技術を挙

げることが出来ます。私たちの平均寿命の著しい延びの大半をそれに依っている一方、脳死を巡る意見は必ずしも収束したとは云えないように思います。

しかし、この方法を徹底するならば、基本的に人間機械論という決定論に行きつくこととなります。この議論の行く末は、結局、デカルトが動物を機械と見做したように、人間がロボットになることではないのでしょうか。

人間の本質である自由な発想による創造性は消えてしまいましたが、良いのでしょうか、大きな議論の課題となりましょう。

デカルトの心身問題は極めて基本的なもので、私たちの問題、感性にも関係があります。と云うのは、デカルトが精神によって、明晰に捉えられるとしたのは、広がりのある延長として物であったからです。即ち、ロックのところで、説明した一次的性質、二次的性質という区別は実はデカルトの作ったものだったのです。経験論者のロックは、ここでは論敵であるデカルトの考えを受け入れたと云えるのです。

それはともかく心身問題に戻ると、デカルトにとって、色、匂い、肌触り等の二次的性質は私の外にあるものの性質ではあっても、私の明晰な精神によっては把握できない対象であったという事です。デカルトやロックは二次的性質を物体の性質ではなく、私の感覚が作り上げた主観的なものと考えたのです。(ロックには、自然科学的知識に関する認識と政治理論における民主主義についての業績が知られています。こうしたロックの認識論は、人間の精神として、思考のみならず、行為する人間にも目を向けることで、精神に「人格」も含めたところに独自性が認められるでしょう。)

なお、ロックの後のバークレイやヒュームによる観念論では、デカルトの云う物の一次的性質すら明晰に認識できるということを否定します。つまり、彼らにとっては、ものの実在について外から私に知らせるものは何もなくなるという、「もの」の認識、即ち知識に対する極端な懐疑が結果として残されました。こうした帰結が、彼らの思想を観念論と呼ぶ所以でしょう。

い) 他我問題：他我認識不可知論

私達は、日常生活で誰かに会えば、相手の顔を見て挨拶します。相手の顔を見て挨拶するのは相手に対する礼儀ですが、それだけとはいえません。顔の表情には、感情、情動、意志といった人の内面にある心の状態が、身体表面の物的に表出されるという常識があるからです。しかし、こうした多くの人の常識となっている表情の理解は本当なののでしょうか？ 本当に、心の内に起きた心的現象（心情）が身体をマグマのように移動して身体表面の表情に現れたのでしょうか？ 私たちは実感として、何か相手に隠し事をして、それを隠して平然としてはいられず、強張った表情や緊張した声に影響が現われるという体験から、上の常識はうまれたのでしょうか。

ところで、他我問題とは、他者の心理は、身体現象を手掛かりに間接的にしか分からない、つまり、他者の心の内容を正しく把握しえないという問題です。

表情の理解は他我理解の例であり、理解者の側の主観的な思い入れにすぎず客観的認識でない。つまり、厳密に言えば、他人の痛みなど、他者の心について知ることは不可能ということになります。

なお、この他我認識不可知論は独我論という議論に隣接しています。

独我論とは、文字通り世界の中に存在するのは私だけという思想です。これは、私が見たり聞いたりしている世界は、私の意識する観念によって、私が構成した現象である。つまり、世界とは私の心の中に創られたものであり、従って、私の精神が思考をやめたときには、世界は存在しないということになります。独我論はこうした認識を云います。

こうした独我論の見方は、極端に聞こえますが、実は、デカルトやカントの見方に極めて近接しているものです。デカルトは神の存在によって、〈私〉の存在や自然の实在を導くという議論をしますが、神の存在が取り払われた時、結局は、〈私〉だけが存在して、私の意識の内にあるものは、外のものの幻影かもしれない。また、神の存在という議論の支えを外した時、バークレイやヒュームの経験論も、世界には私の観念しか存在しないという独我論に向かうように思えます。

この独我論の問題を回避しようとする考えとしては、最近になって現れた現

象学や「言語論的転回」と呼ばれていることがあります。

(2) ヒュームの情念と共感

2-1) 想像力の働きと観念連合

『人間本性論』という著書の中で、ヒュームは人間の本性として、人間の精神の働きを、知性（第一巻）、情念（第二巻）、道徳（第三巻）から論じています。

ヒュームは精神の対象を「知覚」と呼び、その中に「印象」と「観念」という2種類を考えます。印象は我々が感覚を通じ世界から直接受ける鮮明な知覚で、観念は印象を記憶したりして鮮明さが落ちた知覚とします。印象と観念は原因と結果の関係にあり、観念は印象を原因とした鮮明さの落ちたコピーと云えます。

世界の構造を表す基礎的観念を分析すると、観念の材料である印象の中に、観念の原形が含まれていないことがある。印象から観念に直接転化したものではなく、経験の蓄積を通じて形成される「観念連合」によっている。観念連合では観念同士が互いに結びついて新しい観念が生まれる。ヒュームに依れば、この観念連合による新しい観念は、理性の力ではなく、想像力の働きによって産み出される。

ヒュームの経験論で最も大きな影響力のあるのは、習慣による物の因果性を巡る主張ですが、そのことは既に紹介しましたので、ここでは共感に向けた話に進めましょう。

2-2) ヒュームの情念と共感

ヒュームの「情念」は「印象」の一つとされます。しかし、情念は感覚的な印象とは異なり、観念などにより私たちの中に引き起こされる「二次的」、「反省的」な印象です。

感覚的印象は、活気が失われて観念になりますが、その観念は私達の想像力により自由に連合します。一方、他の観念や印象を先行する原因としている情念は感覚的印象とは異なるが、観念とは生き生きと感じられる点が違う。

情念はさらに先行する原因との関係から、直接的情念と間接的情念に分かれる。直接的情念には、「嫌悪」、「歓喜」や「悲哀」などが、間接的情念には、「自負」、「嫉妬」や「憐れみ」などが属す。間接的情念においては、原因との間に他の要素が介在して間接的に情念を喚起するとされます。主にヒュームが着目したのは原因との直接的因果関係は明らかでないこの間接的情念でした。

ところでヒュームが、私達の中に自然に起きるといふ「共感」とは、この間接的情念の一種です。つまり、共感とは、それを引き起こす直接的原因の他に、何らかの別な要素が加わって起きる。この別な要素としては、対象との類似性による共同性があります。例えば、徳のある人物に対して、私達の中に自然な「敬意」が湧き起こる場合、その人物の徳が直接あたえる情動的な印象の他に、更に私達とその人物の間に、想像によって働く共感による敬意という新たな情念が生まれています。私達はその人物の徳を尊敬したり、称賛するのは、直接的印象と共感によって得られる印象との間に一定の結びつきが起きたからです。つまり、共感においては、「印象間の連合」によって間接的情念が起きていると言う訳です。

ヒュームの議論では、観念に対する連合、観念連合が知られています。それによって、私達の精神の中で、観念は想像力により素早く自由に組み替えられます（これが、ヒュームによる“知性”です）。それに対し情念の連合は、遅く渋滞的に起きるものですが、決して、生得的に不変のものではなく、想像の力によってゆっくり変動していくとされます。

共感に対するこうしたヒュームの見方は、社会の共同体の組み換えの可能性を示唆するもので、大変興味深いのではないのでしょうか。

(3) 近代合理主義と経験論に関する暫定的なまとめと新しい人間像へ

ここまで、近代西欧に的を絞って、私達の考え方の根底をなす近代的思考の源を、合理主義と経験論という流れに沿って辿ってきました。その中で私たちの対象である、感性の基本的な位置づけもある程度ははっきりしてきました。即ち、感性という言葉自体は西欧のはじまり、つまり、ギリシャ時代に既に使われていた。しかし、感性と云う言葉の意味が今日議論される内容と具体的に関わる

のは、デカルトの一次的性質と2次的性質の分離の議論が始まると見ることが出来そうです。デカルトの議論に依れば、〈私〉の外にある物について、色、匂い、触感などの2次的性質は〈私〉という精神によっては明晰に捉えられない。それらの2次的性質（質的性質：クオリア）は、外にある物の持つ性質とは云えない、主観によって作り上げられたもの（観念）であると。

上のことが正しいとすれば、私達が先へ進むためには、そうした帰結を導いた源に立ち返って、対処することが必要だということになります。それが導かれた源は、今回行った議論から、心身二元論にあります。心身二元論による心身問題が感性工学に大いに関係しているというだけでなく、心身二元論を回避する具体的方法が求められているのではないのでしょうか。

今回とりあえず、ここまで辿りつきましたが、今後は、心身二元論を回避すると共に、今日の感性を捉える方法について考えて行く必要があります。

そのため次回以降、近代の基礎をなす18世紀を超え、19世紀以降、特に現代に至る考え方として、人間の行為に焦点を当てた見方を参照して、表題にある物づくりについてのあたらしい議論を急ぎたいと思います。

ところで、著者は理系の出身で思想などについては素人ですが、最近少し詳しく調べてみると、デカルトの心身問題への矛盾含みの対応だけでなく、えっと云う結末で終わっていると感じる議論はカント等にもあります。

著者が教育を受けた理系の議論ではこうしたことはほとんど経験したことがありません。理系とは異なって、思想や思考など人文系の分野での議論では、そうした事例はかなりあるように思われます。

デカルトは近代合理主義の創設者として、文系・理系などに依らずに最高の栄誉があたえられていると思われませんが、上に述べたような矛盾を孕んだ結末は意外なものでした。その評価はどう受け止めるべきか戸惑いを感じるのは著者だけなのではないでしょうか。

これからの時代は、20世紀の分業の時代と違って、例え全く経験がないことにも対処するということが価値になるかもしれません。そのような場合にも、

専門家任せにせず、素人の考え方や評価がすることが求められるのではないかと思います。

現状を変え、新しい時代を築くということは、そうしたことなしにどうして可能になるのでしょうか。感性工学には、そのような時代を拓く実践が問われているように思います。

付録

① 観念の知覚

哲学史では、17世紀から18世紀にかけて近代西欧に大きい影響を与えた思想家としてデカルト、ヒューム、カントの名が取り上げられます。そして、その3者の関係は標語的に、デカルトの合理主義に対してヒュームの経験論が対立し、カントはその対立を超越論的観念論によって、のり越えたと云われます。この3者は、表面上、思想的な立場も互いに大きく異なって見えるため、彼らの思想を理解することは易しくないと感じられます。実際、著者は感性工学の研究を開始したときから、カントが云う感性なる言葉が気になって、「純粋理性批判」を手に入れました。しかし、長い間カントの思考上の構え、つまり、どうして彼はあのような発想をするのか、正直理解できないのではないかと考えていました。実際、多くの人がカントで挫折したとも聞かれます。

以前にも触れましたが、そうした人にも役立つであろうヒントとして、ここで改めて「観念の知覚」という概念を簡単に説明しておきます。

観念の知覚とは、私の精神は、(私の外にあるものではなく、)自らの内にある観念(アイデア)を対象として知覚する。と同時に、観念は私の外にあるものを表象するという認識モデルを指します。この「観念の知覚モデル」によれば、精神の意識が向かう直接の対象は自らの観念で、外部の対象は観念により表象されるという形で間接的に精神作用の対象になるという図式になります。

この観念の知覚モデルという枠組みはデカルトに発するものですが、その後のヒュームのみならずカントなど近代西欧の思想はほぼ皆このモデルに立って議論していると云えそうで、非常に重要なものと思えます。しかしながら一方で、これは、近代物理学などの素朴实在論のモデルとは対立しますから、そこ

に仲たがいが生まれるのは必至でありましょう。

②主観／客観図式と一致

デカルトによれば、〈私〉は外にある物体を対象としてそれが何かを精確に認識することが出来る。こうした、デカルトが立てた世界の見方は、私たちが今日普通していること、つまり、私という主観が、対象として物を客観的に見ているという見方になっています。このような見方は、主観／客観図式と呼ばれますが、今日の常識とも云えるものです。例えば、通常経験として、目の前に一つの石ころを見つけたとすると、通常経験では、そこに転がっている石を見た私はその石を認識したと思う。しかし、こうした主観／客観図式は、通常経験していると思っただけのことであっても、論理的に考えると当たり前とは云えないことが分かります。つまり、私は、私の目の前にある石ころという対象を認識するとき、私が認識しようとしている石ころが目の前にあるその石ころと一致することを論理的に示すことは出来ないからです。

このように、主観／客観図式における一致問題も、本文の心身問題と同型な問題と云えます。